〔付論２〕

建物の性格について

西島　眞理子
（熊本県建築士会　調査研究委員会副委員長）

隈部館には、どのような建物が建てられ、どのような空間であったのかを考えてみる。近年の発掘調査から、室町時代の守護大名や在地領主の居館について様々なことが明らかにされている。足利義満によって造営された将軍邸「室町殿」（通称「花の御所」）において確立したとされる新しい武家の邸宅様式が、規範として地方の居館に取り入れられている(注1)。洛中洛外図屏風（歴博甲本、上杉本等）の将軍邸や細川管領邸に見られるように、敷地は方形で、外周は堀や塀で囲まれていた。正面には「正門」と「脇門」、その中の広場の奥には現在の玄関に当たる「遠侍」、公式の会見の場である「主殿」、社交や遊興の場である「会所」、会所に接した庭園、奥には当主の日常生活の場である「常の御殿」や「台所」等の建物群が配置されていた。特に庭園は、会所に伴うものとして設けられ、室内からの視点に対応した方向性を持ち、床・棚への美術品の飾り付けと同様に客へのもてなしの装置であるともいわれている(注2)。守護大名や在地領主達は、将軍邸を真似ることによって、その空間で行れる作法・儀式等も倣い、幕府との結びつきや自己の権威を誇示したのであろう。このような庭園を持った様式が広まっていったのは、有力在地領主館においては15世紀前半頃、守護館では15世紀末～16世紀前半頃が最盛期といわれている(注3)。

これらの発掘例の中で、隈部館と同程度の規模のものとして、飛騨の江馬氏館、美濃の東氏館、信濃の中野氏館があげられる。いずれも、規模は80～100m四方の方形の敷地で、庭園には石組みの池が築かれていた。江馬氏館には、２つの「門」、「遠侍」、「主殿」、「会所」、「常の御殿」、「台所」等が確認されている(注4)。西日本では、周防の大内氏館、豊後の大友氏館、安芸の吉川元春館等が同様な構成としてあげられる。大内氏や大友氏の館は守護館であるため大規模であるが、大内氏館の発掘調査によると、16世紀前半の遺構に、庭園（枯山水様式）と共に近接して礎石建物跡が発見されている(注5)。

これらの類例から推察すると、隈部館も同様の構成ではないかと思われ、建物１は「主殿」、庭園に面した建物２は「会所」、建物３の２棟は、「台所と居間」と考える。建物１の「主殿」は、梁間５間・桁行７間の建物で、梁間の両端は広縁と思われる。広縁のみ5.3尺であるが、部屋内は、１間＝6.5尺を基準として３間×７間である。内部の部屋割りは現時点では明らかではないが、建物の性格を考えると、地方であっても床・棚・付書院を備えた正式な書院座敷が設けられていたであろう。また、瓦は発掘されていないことより、板葺き、こけら葺きあるいは草葺きが考えられる。庭園は、後方の猿返し山を背景とし、斜面となっている山の裾野を庭内に取り込み、その前に石組みの滝と池を配置している。発掘により水路が発見されたということであるので、池には水が湛えられていたであろう。この庭園に接して会所が建てられ、会所の座敷からは、座って庭園が鑑賞できるようになっていた。建物２の「会所」は、主殿のような格式を重んじた建物ではなく、武家独自の社交や遊興の場という性格を持つ空間であった。隈部氏は、会所に客を招き、四季折々の庭園を鑑賞しながら、連歌や茶を催したのであろう。建物３については、３間×６間程度の建物が２棟並んでいるように見えるが、柱位置が明確には掴めない。床は、転ばし根太を並べ、板を張ったのかもしれない。３ヵ所の環状列石が炉跡であるならば、領主の私的空間、すなわち炉を囲んで食事をしたり、くつろいだりする居間のような空間ではないかと考える。しかし、隈部館全体の発掘調査を待たなければ、この建物の性格を確認することはできない。

戦国時代には、山上に城を築き、その麓に居館を持つ例が数多くあげられる。隈部館は、詰めの城とさ

れる山上の猿返城の西麓に築かれた居館であるが、標高が345mあり、集落からは比高差が110mある高地に位置している。また、正面には、土塁や堀切、そして低い石垣を積んだ桝型の虎口、屋敷地両側面は切り立てられた急峻な土手、山の斜面と接する背面は堀切といったかなり強力な防御体制を備えており、山城そのものの内部に館を構えたとも思える。他の発掘例との相違点は、地域・地形・時代によるものなのか、あるいは特異性なのか、今後発掘される近辺の類例との比較により明らかにされると思われる。

〔遺構の建築年代について〕

隈部氏はいつからこの地に居館を建てたのか、遺物等の年代を示すものは発見されていないが、４人の領主の時代を取り上げて建築年代を推定する。

１．忠直（1426～1494没）の時代

文明13年（1481）、守護大名菊池重朝により隈府において「万句連歌発句の会」が二十亭で催された時、忠直は第三亭の席主をつとめた(注6)。その当時の館には、連歌を催すに足る眺望や庭、また室礼などを考慮した部屋を備えた建物(注7)を整えていたと思われる。忠直は、菊池重朝に仕え、文化的なことに力を尽くした人物である。文明４年（1472）には、重朝に協力し孔子廟を建立する。そして、文明８年（1476）には、朱子学の第一人者である南禅寺の僧桂庵玄樹が隈府に下向した際に師事している。桂庵玄樹の出身地である周防には、その当時多くの文化人が集まっていた。大内氏の築山館には連歌師宗祇が訪れ(注8)、そして、玄樹と京都で親交の厚かった雪舟(注9)は、周防に庵を結んでいた。諸国を巡る宗祇などの情報伝達者によって庭園文化の情報が伝播し、その先で新奇な趣向を付加され、それがさらに伝播するといったネットワークが形成されていたのではないか(注10)とも言われている。

２．武治（生没不明）・貞明（～1539没）の時代

隈部親養氏の『清和源氏 隈部家代々物語』に「武治･･･後に永野猿返城に移る。･･」「貞明･･･八方ヶ嶽猿返城を本拠として城郭を拡げ険要を修して同城を難攻の堅城とし給う。兼々私館を城外に構えて居住されしという。･･･」「･･猿返城は･･初め隈部家の砦なりしが、武治公、貞明公の二代に亘りて城域を拡げ、･･･」と記されている。貞明の頃には「難攻の堅城」にしなければならなかった周囲の逼迫した状況があったのであろう。また、貞明は、天文八年（1539）館登り口下にある清潭寺に葬られている。

３．親永（～1588没）の時代

16世紀の初めころから守護大名の菊池氏が衰退し、16世紀の半ば近くには没落する。菊池氏三家老は隈部氏・赤星氏・城氏であったが、その後、親永は赤星氏を撃破し、隈部氏の勢力が最も興隆した。

隈部氏はいつ頃からこの地に居住したかを考えてみる。「万句連歌発句の会」を行った文明13年（1481）には、隈部氏の一族である阿佐古氏・長野氏は、この館近くの阿佐古・長野地区を領していた。そして、館登り口下にある清潭寺は、もと内田相良氏の菩提寺だった寺を隈部氏が再興したとされており、寺の前面に立つ逆修塔には、「富田安芸守源直方敬白」「･･大永八年（1528）･･」と刻まれている。直方は、隈部忠直の長子の系統であり、系図には「修補 清潭寺」と記されている(注11)。また、伝承ではあるが「富田安芸守邸宅」の跡が館と清潭寺の間の「大手門」と言われている位置にあること等より、隈部氏は16世紀初めにはこの館に本拠をもっていたと思われる。

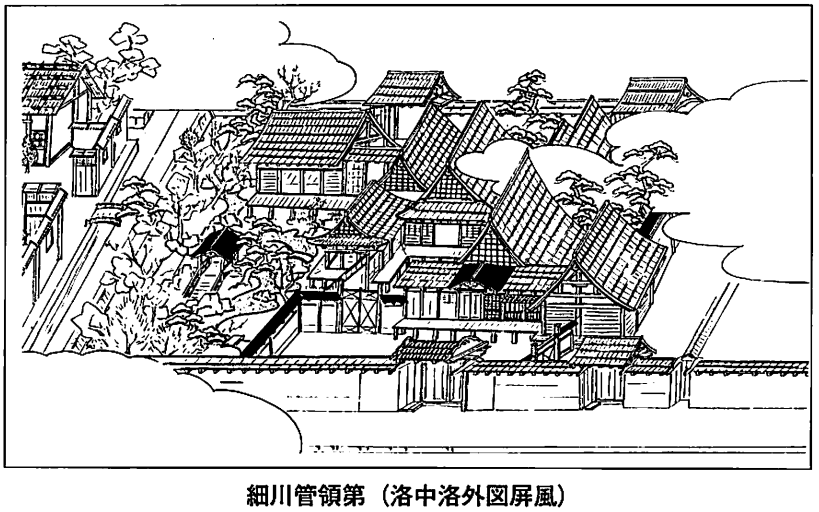
それでは、この礎石建物や庭園はいつ築かれたのであろうか。前述の大内氏館のように16世紀前半とされる庭園を伴った礎石建物の例もあるが、一般的には、石積みの桝型虎口や礎石建物、また１間＝6.5尺を基準とするのは戦国時代後期だと考えられる。

このように考えると、この館は、16世紀初め（武治・貞明の時代）に築かれ、16世紀半ば頃（親永の時

代）に、礎石建物に建て替えたのではないかと推定する。将来、礎石建物の下層を発掘すると、遺物や掘立て柱建物跡が出てくる可能性があると思われる。

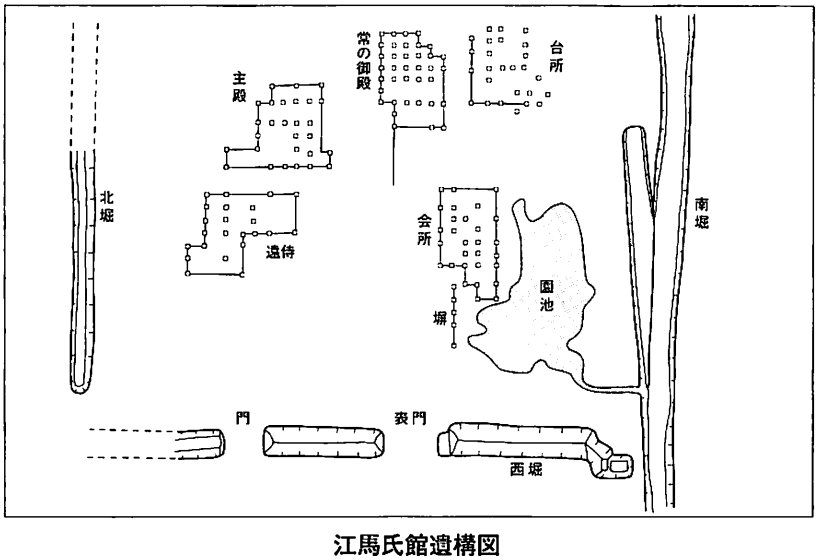
この館跡に立ち、庭園やそれに続く小高い山そして背景の山々を眺める時、「万句連歌発句の会」などを行った忠直の、武士としての教養の高さや他の文化人との交流の広さが思い起こされ、この館は、忠直が直接造ったものではないが、彼の洗練された文化的な素養が代々受け継がれているのではないかと、私には感じられる。

（注１）　日本建築史　2003年　後藤治 共立出版㈱
（注２）　戦国時代の城館の庭園　1999年　小野健吉　奈文研 年報
（注３）　天下統一と城　2002年　国立歴史民族博物館 千田嘉博・小島道裕　塙書房
（注４）　江馬氏城館跡Ⅲ　神岡町教育委員会
（注５）　史跡大内氏館跡（枯山水庭園跡）　山口市教育委員会
（注６）　清和源氏 隈部家代々物語　1964年　隈部親養
（注７）　文学（連歌張行の建物・部屋）　廣木一人　2002年　岩波書
（注８）　宗祇は、文明12年（1480）に大内氏の招きで周防を訪れている。
（注９）　僧雪舟は、15世紀半ば過ぎに周防に移り、絵画だけでなく作庭も行っていたとされる。山口市常栄寺の資料より、「「雪舟庭園」は、もと妙喜寺の庭園で康正元年（1455）の創建、庭園は大内政弘が雪舟に命じて造らせたものと伝えられている。」とある。
（注10）　戦国時代の城館の庭園　1999年　小野健吉　奈文研 年報
（注11）　菊鹿町史　1996年　菊鹿町



細川管領第（洛中洛外図屏風）

「日本建築史図集」日本建築学会1980年より転載



江馬氏館遺構図

※「江馬氏城館跡Ⅲ」岐阜県吉城郡神岡町教育委員会　掲載図を再トレースしたもの。